

秋庭太郎著「日本新劇史」上・下

山田 朗

日本に於ける近代劇の歩みを調べる場合、必ずぶつかる問題がある。それは近代劇の發生を何処に求めるかという問題である。それには各人各説があり、こゝで論議している枚数が無いが、要するに近代劇の萌芽を何処に求めるかは、近代劇の概念を如何に把握するかによつて決まるといえよう。とかく世人は、近代劇といえれば外国の翻譯戯曲や、思想を押しつけたような青くさい戯曲を指すようであるが、評者などは反対だ。近代劇といふものは時代の古今に拘らず、近代の眼で描かれたものは一応その領域に入れて置いていゝのではなからうか。少しその点に触れて置こう。宇野信夫氏の戯曲「難波の芦」は、日本の古い説話集「大和物語」に材を得ている内容は貧の爲に夫婦別れた男女が、二十年後再会するが、男は卑しい芦刈男に、女は公卿の女房になつていたという話。「大和物語」のこの説話はそのままでは近代劇でない。これは明らかだ。宇野氏はこの夫婦に近代的解釈を与えているのである。即ち、二人は心で愛しながら、心にもなく喧嘩してそのまま、別れるが、二十年後再会した二人は垣根を隔て、お互いの心を打ち明けるのである。これ

でこそこの説話は立派に近代劇として成り立つ。これは一例に過ぎないが、世間の通説に従えば、こうした古物語は旧劇として取り扱われようであるが、そうした近代劇の概念はいさゝか狭きに過ぎないか。もつともこうした通説が出来上つたのにも一理はある。坪内逍遙や小内山薫らによつて日本に近代劇運動が起され、逍遙の文芸協会、小山内の築地小劇場の果たした役割は大きい。いざ近代劇を上演するとなると創作戯曲に恵まれず、海外戯曲を上演するしか仕方なかつた。そういう訳で逍遙・抱月・小山内・土方らによつて、海外戯曲の翻譯上演が盛んになり、全盛時代を生み出すに至つた訳であるが、それはまた日本の国民劇推進を疎外する結果にもなり、前述の如き通説の生れる基礎を作りましたのである。

さて、本書の著者秋庭氏は近代劇の概念をどう見ているか。序にいう、「従来新劇史といへば明治末期の文芸協会自由劇場の演劇運動即ち西洋の近代劇の移植された時を発端として説かれてゐるが、私は旧劇即歌舞伎劇に対立する意味に於ける広義のわが新劇の歴史といふ立場から、その胎動期と目すべき明治十年代を發端として稿ならぬ努力の賜物であろう。興行記録は研究者ばかりでなく、興行者にとつてもよりよき資料となる訳で貴重なるものであるが、残念な事に年表が附されていないので、いさゝか取扱いが不便である。改訂の折には是非心掛けて欲しいものである。第三の演劇の役割に関しては、この書の特徴を有するものであるが、絶えず文学や政治の動きを対象させながら叙述を進めているのは一貫した演劇史では当然の事ながら注目したい。いわば今迄の日本の演劇史を更に一歩前進させた点、この書の意義は大きい。

上巻は団十郎の「活歴劇」より始めて、「演劇改良運動」、「士芝居」 「新派の發達」を経て「イブセンの移入と影響」に終つてゐる。中では「演劇改良運動」が他の演劇史では余り触れられていないだけに目をひく。この運動は当時の欧化主義ののつとつたもので、民衆の中から出て来たものでなかつただけに空転に終つたが、この運動が契機となつて演劇論が輩出し、逍遙の史劇熱ともなつた事を思えば、この運動の近代劇運動に投げかけた波紋は大きい。「イブセンの移入と影響」も婦人問題の向上や、国民精神に及ぼした影響を考えると忘れる事は出来ないが、やはり「士芝居」から「新派」に多くのベースがとられている。川上や角藤の士芝居といつても我々には分らないが、当時の歌舞伎劇を見馴れていた人達にはそのきび／＼した演技がすぐ新鮮に映たらしい。新派の先駆としての意義は大きい。川上がその幕間にオツベケベ節を挿んでいた事でも知れる如く余り調子の高いものではなかつたらしい。伊井・河合・高田・喜多村・村田・井上と新派は数々の名優を世に送りながら第一線に出られなかつたのは、一にも二にも俳優第一主義で作品

を起した……(以下略) 即ち、近代劇の概念を歌舞伎に対立する新興演劇とみなしているのである。日本に新劇史の類はあるが、その意味においてこれは本格的な新劇史とする。何故なら明治初期の新興演劇より説き起す事によつて、日本演劇に於ける新劇の位置が明確になつて来るからである。殊に歌舞伎劇が新劇に近づき、新派と新劇の間が紙一重である現状にあつては、新劇の位置をはつきりして置かなくては真に近代劇の發展をとらえる事は出来ない。

そもそも演劇史には二つの使命があるようである。一つは演劇事象の正確な記述であり、今一つは演劇が時代に如何なる役割を果したかということ。前者は演劇史としては本質的なものであり、今迄の演劇史でも一応役目を果してはいるものの、後者にまで深い鍼を入れてゐるものは極めて少い。云い換えるならば、日本の演劇史は事象の羅列に終り時代との対決に目をそむけていたのである。本書はそうした過去の欠点をかなり補つて一応のまとまりをつけている。第一の事象の記述の点では先づ完璧に近い。興行記録もこれ程明細に亘るものはなかつたといつてよく、特に上方の記録にまで目を行き亘らせてゐるのは良心的である。しかも単なる記録にとゞまらず、劇評や自叙伝を引用してかなり多角的に事象をとらえているあたりは特色がある。各界名士の劇評など手近かな資料に乏しいだけに興味ある記事だが、芸術座時代における抱月と須磨子の恋愛沙汰は記事として面白いばかりでなく、演劇史的にも意義がある。須磨子は独占欲が強く、男優との間に絶えずめごとがあつたのは周知の通りだが、その辺の材料に乏しいのは惜しい。内裏話に溺れず、さりとて記述に終始せず、かなり高い格調を保つてゐるのは著者の並々

に傑出したものが生れなかつたからに他ならない事を思うと、それが新派の宿命なのだろうが、現在の新派を含めてその限界の狭さを思わずにはいられないのである。

近代劇運動の先駆時代たる上巻に較べると、下巻はさすがに本来的な問題に入っている。中心は勿論築地小劇場時代であるが、築地小劇場旗挙げ前後の消息が詳しい。中でも小山内が築地小劇場開場に先立つての講演会で「……何故日本の物をやらぬか？ 私達は演出者として日本の既成作家、——若し私自身がさうであつたらそれも含める——の劇作から何等演出慾を唆られないからだ。（以下略）」と語つた一件が問題化して論争を起したが、この事情は材料も豊富で正確を期している。たゞ築地小劇場時代の記述はやゝ公演記録を追い過ぎ、その前後に較べて物足らぬが、同じ事は自由劇場時代にもいえよう。これは従来の演劇史に詳しいから避けたとも見られるが、左団次の野心は買われてよく、その意義は文芸協会より遙かに大きいと思われる故、一考して欲しいところだ。プロレタリア演劇の萌芽と農村に於ける新劇運動を扱つたのは大きな特色で、職工達と舞台との交流のまざ／＼と描かれているところ、著者の広い視野に立つての研究眼の確かさを物語る。先にも触れた通り、現代に近づく程興味も増してくるだけに、下巻ではもう少し実例に沿つて記述して欲しかつた点もあり、更に築地小劇場以後の新劇との関係にまで筆を進めていないのは、この著者にして珍しいミスといわねばならぬ。

「日本新劇史」を一読して先づ感じた事は、逍遙の演劇論の実践

後記

快晴に恵まれた春分の日、昭和三十一年度卒業式が行われました。

この日、式場に参列された日本文学専攻卒業生諸兄姉が入学された昭和二十九年春に、本会も発足し、爾來四年間新卒業生共々に喜びも苦しみも味わってきたわけです。この間「論究日本文学」も七号を刊行、会員数は年々増加し、本会も一応順調な歩みが続けてまいりました。

本年もまた多数の新会員を迎えることになりました。研究意欲にもえるこれら若い人達の力を新たに得て、「論究」が会員諸兄姉のよき伴侶となり、ますます充実したものとなりますよう、なお一層の御協力をお願いいたします。

次号より「会員消息欄」を設けたいと思ひます。会員の皆さまの住所・職業・身上に移動のありました折は御通知下さい。

第九号は、八月三十一日原稿締切、十月初旬刊行を予定しております。多数御寄稿下さるよう、お願いいたします。

である史劇と小山内の提唱した国民劇の流れが如何なる可能性をもつているかという事である。そしてその結果は残念ながら否定せざるを得ない。歌舞伎劇は大正期に新歌舞伎なる分野を開いた。岡本綺堂・真山青果・岡鬼太郎・池田大伍など名作者が輩出したせいもあつたが、とにもかくにも史劇の伝統は水を切つて流れ出した。しかし、これら大正期の所産は今では古典に近い。そこで昭和歌舞伎なるものが要求される訳だがこれはカブキ・スペクタクルに近い。東西に歌舞伎座なる大きな容積の劇場をもつた非もあろうが、内容よりもスペクタクルに重点が置かれていくとみてよく、僅かに「風浪」、「石狩川」など新劇側から出された一連の作品に支流を見るのみである。築地小劇場の伝統を継ぐ新劇にしても、観念劇や詩劇などと未だに実験の域を出ず、小山内の提唱した国民劇への逍遙けしの感がある。

一体これは何故か。前述した通り、日本の近代劇が発展しなければならぬ時において、創作戯曲なく進展を阻まれた事も一因であるが、これは観客の受け入れ態勢にも罪がある。即ち、冒頭に述べた近代劇といへば翻譯戯曲という悪弊が国民劇を推進しなかつたからである。今、日本の演劇は総体について低調である。旧劇にも新劇にも左団次や小山内のような野心家がいまいせいであろうが、我々は今こそ史劇や国民劇の伝統をしつかり握つて進まねばならないと思う。「日本新劇史」が逍遙や小山内の業績の中から日本演劇の進むべき道を教えてくれたとすれば、それで充分成功であらう。

(上巻 昭和三十年十二月二十日発行 一〇〇〇円 下巻 昭和三十一年十一月二十日発行 一二〇〇円 理想社刊)

立命館大学日本文学会清規抄

- 一、本会は立命館大学日本文学会といふ。
- 一、本会は日本文学の研究を推進すると共に会員相互の親睦を図る事を目的とする。
- 一、本会は機関誌「論究日本文学」を刊行し、研究会講演会を開催する他、事業を行う。
- 一、本会の会員は普通会員、準会員、賛助会員とする。
- 一、普通会員は立命館大学日本文学専攻の教員、卒業生、在学生とする。
- 一、本会に役員として、会長一名、評議員若干名を置く。
- 一、会員は總會を形成し、会則の変更その他の大綱は總會に於てこれを決する。
- 一、本会の経費は会費その他の収入による。

昭和三十三年四月五日印刷
昭和三十三年四月十日発行

非売品

編輯兼 立命館大学日本文学会
 発行者 森 本 修
 印刷所 京都市上京区下長者町通
 土屋町東入
 共同印刷株式会社
 発行所 京都市上京区河原町通
 広小路西入ル
 立命館大学日本文学会

本会への入会申込・会費の払込はすべて左記へお願い致します。
 入会金 五拾円
 会費 一年四百円(四回分納も可)

京都市西陣局区内
 河原町通広小路西入ル
 立命館大学文学部内
 立命館大学日本文学会
 振替京都市三八三番